伴侶の偏差値

深沢 潮

新潮社

伴侶の偏差値

深沢 潮

新潮社

深沢潮（ふかざわ・うしお）
東京都生まれ。
二〇一二年「金江のおばさん」で第十一回「女による女のためのR-18文学賞」大賞を受賞。著書に、受賞作を含む連作長編小説『ハンサラン 愛する人びと』がある。

伴侶の偏差値

二〇一四年 三 月二〇日 発行

著 者／深沢潮
発行者／佐藤隆信
発行所／株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一
郵便番号一六二―八七一一
電話 編集部(03)三二六六―五四一一
読者係(03)三二六六―五一一一
http://www.shinchosha.co.jp

印刷所／大日本印刷株式会社
製本所／大口製本印刷株式会社
乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Ushio Fukazawa 2014, Printed in Japan

ISBN978-4-10-333542-9 C0093
価格はカバーに表示してあります。

伴侶の偏差値　目次

1 モデルルーム 5
2 錦糸町の彼 47
3 田園調布の女友達 78
4 ミネストローネスープ 98
5 大井町で花見 132
6 マイホーム 176
7 黒いワンピース 200
8 小川町の日々 222
9 ハッピーウェディング 252

伴侶の偏差値　目次

1 モデルルーム 5
2 錦糸町の彼 47
3 田園調布の女友達 78
4 ミネストローネスープ 98
5 大井町で花見 132
6 マイホーム 176
7 黒いワンピース 200
8 小川町の日々 222
9 ハッピーウェディング 252

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

伴侶の偏差値

1　モデルルーム

「しゅんくん、これなんてどうかなあ？」
女は、鼻にかかる媚びた声とともに振り向いた。黒いリボンがついたブラジャーとショーツのセットを手にしている。ピンクの生地に黒の水玉模様だ。
「うーん。かわいいけどね。みこりんだったら、なんでも似合うし。けど、俺は白いのがいいな」
男の声はやけに高い。真紀に背を向けているが、にやけた顔が想像できる。聞き耳を立てながら、真紀は薄いグレーのセットを見ていた。
やっぱり、白か。
真紀より確実に十歳は若いと思われるカップルは、一通りの商品をひやかして出ていった。
真紀は店員に、あの、と声をかけた。
「これのBカップを試着できますか」
レースがふんだんに施された白いブラジャーを指さす。
白い下着を嫌いな男はほとんどいない。

これまでの知識を総動員して結論づけた。
試着室の中の大きな鏡の前で、ポーズをとってみる。
うん、けっこういい感じ。
鏡の中の自分に微笑みかける。
いつもはさっさと下着を剝いでしまう新宮も、これならきっと喜んでくれるに違いない。それにこうしてみると、からだの線もまだまだ崩れていない。
会計を済ませて店の外に出た。大通りの勾配を下る。オープンカフェの前で立ち止まり、携帯電話で時間を確認する。
待ち合わせの五分前だった。きっと佳乃はもう来ているだろう。佳乃は、昔から十分前には約束の場所に着いている。
店に入る前に、ショッピングバッグを二つに折り、肩からかけていた合皮のバッグに押し込んだ。ピンク色のショッピングバッグには、ランジェリーショップのロゴが刷ってある。このショッピングバッグを佳乃や未央に見られたくなかった。
案の定、佳乃は先にテラス席にいた。所在なげな顔が、真紀を見つけると安心した表情に変わった。だが真紀が席に着いても、ちらちらと周りを気にしている。
佳乃と未央に会うのは二年ぶりで、未央の結婚式以来だった。昨日、「久しぶりに三人で会おう」と未央からメールが来て、この店を指定された。たまたま予定が空いていたからいいものの、いつだって未央は唐突なのだ。なのに、当の未央はいつものごとく約束の時間に遅れて

いる。

予定が空いていたとは言っても、本来土曜日は、週末の楽しみである物件めぐりをするはずだった。そのために一週間、インターネットを駆使してめぼしい物件情報を集めてある。

物件めぐりは明日の昼間にすることにしたけれど。

それに佳乃だって、子どもを預けてこなくちゃならないんだから。

佳乃と未央は、真紀の大学の同級生だ。常に三人で行動していた。卒業旅行も一緒に行った。だがあんなに仲が良かったのに、いつの間にか会う頻度が減っている。

「先に注文しようか」

そう言って真紀がメニューを手にすると、佳乃が救われたような顔を向けた。

「そうね、そうしよう。こういう店、なんだか落ち着かないよね」

カフェは通りに面したオープンテラスになっている。喫煙席になっているテラスを選んだのは、煙草を喫う未央のためだ。

ここは表参道。まわりに座っている客も洗練されているように見える。いや、少なくとも真紀のように、みな一生懸命ある一定のお洒落のレベルを保つ努力をしている。

季節が冬から春に遷って間もない表参道は、ケヤキ並木がまだ裸のままだ。だが木漏れ日の光はじゅうぶんにあたたかい。

しかし、晴れ渡った早春の一日を楽しむ気分ではなかった。真紀が座っている席は、ケヤキ越しの日差しが薄く当たるだけ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

まるでいまの自分の生活を象徴しているみたいだ。
横の佳乃には、午後の太陽が直接当たっていた。佳乃は、時折まぶしそうに目を細める。
真紀は、椅子を佳乃の方にずらした。すると真紀の肩のあたりに、ようやく明るい陽光が当たった。
「どうしたの？」佳乃が顔を向けた。
「人通りが多くて騒がしいから声が聞こえないと思って」
日の光に当たりたかったなんて、正直には言えなかった。
「そうだねー。なんか、土曜日の表参道は、すごい人だねー。人に酔いそう。それより真紀と久しぶりに会えて嬉しい。たくさんおしゃべりしようねえ」
佳乃はもったりとした調子で言い、えくぼを見せて微笑んだ。
そんなに嬉しくもないけど、と思ったが、佳乃に形ばかりの笑顔を返した。
それが仲良しに対しての礼儀だから。
通りに目を向けると、確かに人の波はひっきりなしに途切れない。
どぎつい化粧の少女と目があって、品定めをするように見つめられる。気まずくなって目をそらす。
テラス席に座る客は、道行く人から目を向けられる。そして、街の一部として溶け込むことが命題となっているように思える。
だとしたら、自分たちは失敗しているのだろう。

メニューを見るふりをしながら、隣に座る佳乃の姿を盗み見た。佳乃はメニューに目を落としている。

佳乃は、テラス席では完全に浮いた存在だ。物語になぞらえて言うなら、まるで白鳥の群れの中に一羽だけアヒルが混じっているような感じだ。佳乃本人が落ち着かないと思うのも無理はない。佳乃と並んで座っているおかげで、真紀までお尻が椅子から離れて、からだが浮き上がっているような気がする。

佳乃といるといらだちを覚えるようになったのは、ここ数年のことだ。こうして同じ時間を過ごしていると、おっとりとした喋り方、天然と言うと聞こえはいいが、愚鈍なまでにまじめなところ、おそらく育ちの良さから来る素直で人を疑わない性格が、むしょうに癪に障るのだ。

佳乃は学生時代から鈍臭かったが、子どもを産んでからはさらに拍車がかかっている。だいたい、どうしてこの服を選ぶのか理解に苦しむ。

佳乃は年配の婦人が好むような、大きな花柄のトップスに、よりによって千鳥格子のスカートを合わせている。そのスカートも、妙に中途半端な丈の長さだ。それでもきっと両方とも高価なものだろう。型がずいぶん古そうだし、佳乃のことだから、母親にもらったとか、あるいは何年も前のものに違いない。だが、こんなに野暮ったいのに、トータルで十万は軽く超える装いであることは確実だ。

いつだってそうなのだ。佳乃は質のいいものしか身につけていない。

一方、真紀が身を包んでいる幾何学模様のワンピースは、ファストファッションの店で買っ

た一万円にも満たないものだ。しかし佳乃に会う前のついさっきまでは、そのアメリカンブランドのワンピースはなかなかのお気に入りで、掘り出しものだと思っていた。

真紀はしだいに喉が渇いていくのを感じ、グラスの水を口に運んだ。

「今、二時半すぎでしょ。朝遅かったから、お昼食べ損ねて中途半端にお腹すいちゃった。オムライスにしようかな」

メニューを見る佳乃の顔は、ゆるんでいるという表現がよく似合う。子どもを三人も産むとこうもからだも表情も弛緩するものなのだろうか。佳乃はだらしなく口を半開きにしている。

オムライス？　そうしなさい。そうしなさい。

ここのオムライスは、とても女性では食べきれないボリュームだ。雑誌に載っていたのを見たことがある。ただでさえ卵をふんだんに使ったオムライスはコレステロールたっぷりで、ゆうに一〇〇〇キロカロリーを超える代物だ。

そう、佳乃。オムライスを食べて、そのしまりのないからだをさらに膨らませるといい。

「私は、サラダプレートでいいかなぁ」

真紀も昼食を食べていなかったが、軽いものにしておいた。こうした小さな節制で体型を維持している。実際朝食をしっかり食べて来たので、あまり空腹ではなかった。それにテラスで大口をあけてオムライスを食べるなんて、スマートとは思えない。

自分の方が、佳乃よりはよっぽど街に馴染んでいる。

確認して、自然と口元に笑みが浮かんだ。お尻がやっと椅子に安定する。

じゃあ注文しようかと、こころもち明るい声で言って、すみません、と近くにいたウェイターの背中に遠慮がちに声をかけた。

ウェイターが振り向いてこちらに来た。そのウェイターに、腰をかがめて顔を近付けられ、真紀は息がつまりそうになった。佳乃もどぎまぎしているのだろう。頬が紅潮している。えーっと、えーっと、と注文せずに同じ言葉を何度も繰り返すだけだ。

毎年佳乃から送られてくる、垢抜けない家族写真の年賀状が頭に浮かぶ。毎日顔を突き合わしているのが、あの冴えない佐伯なのだから、こんなに洗練された男を見て動揺するのも当然かもしれない。

佳乃と佳乃の夫の佐伯は、学生時代の合コンで知り合った。未央が企画した合コンで、真紀もその席にいた。

最初佐伯は真紀を気に入っていたようで、顔を赤らめて必死に話しかけてきたが、真紀は歯牙にもかけなかった。痩せすぎで背も低く、安っぽいシャツをズボンに入れているような貧相なファッションも、女性に対する態度もダサい男だった。通っている大学の偏差値が高いことぐらいしか取り柄はなかった。だから、佳乃と付き合っていると聞いたとき、驚くと同時に、佳乃にはお似合いだと思った。「割れ鍋に綴蓋」という言葉が思い出された。

「ごめん、ごめん、遅れて」

未央が現れてくれて助かった。居心地の悪さから解き放たれる。

「あたしは、エスプレッソだけでいいや」

ウェイターに目配せをしながら、未央が席に着く。未央は、四人掛けのテーブルの残った二つの席のうち、日当たりのいい方の席に座った。明るい午後の日を浴びて、未央は活力に満ちているように真紀の目には映った。

きっと幸せな結婚生活を送っているに違いない。

ウェイターは、未央に向かって慇懃無礼に微笑んだ。未央も微笑み返している。

未央はここの常連かなにかなのだろうか。ずいぶんと慣れた態度だ。

ウェイターは未央の注文を書き留めた後、真紀と佳乃を交互に見た。無造作に生やしたように見せているが、実は緻密に計算してトリミングしているようにも見える口周りと顎の髭が、世慣れしているような印象を与える。ウェイターは口角を上げ、朗らかな笑顔を保っているが、早く決めろと催促しているようにも見える。

「あ、サラダプレートとオムライス」真紀は焦って早口で言った。

「お飲み物はいかがいたしますか？」と湿度の低い声で訊かれると、水で充分なのに、なにか注文しないといけないような気がする。土曜日なので飲み物はセットになっていなかった。

さっきコーヒーが六百円を超えているのを見て、注文するつもりはなかったのだが。

「じゃあ、食後にブレンドと」そう言って、真紀は佳乃を見た。

「えっと、こっ、紅茶、温かい紅茶ください、ミルクティー。しょ、食後に」佳乃が、おどおどとした声で注文した。

ウェイターは伝票にオーダーをメモすると、素早くメニューを持って引き上げた。その動作

は不自然さを感じるほどしなやかだった。真紀はウェイターの後ろ姿を目で追った。
弟の麟太と同じ歳ぐらいかもしれない。いや、もっと下かな。
「いい感じでしょ、彼。二十五だって」
未央が真紀に耳打ちする。真紀ははっとして、小さくかぶりを振った。
「あ、う、うん、そう？　そうかなぁ。そうでもなくない？　あ、でも、そうだね。十歳も下か」動揺して意味をなさない物言いになった。
「あたし、毎日ここにコーヒー飲みに来てるの」未央の目がいたずらっぽく輝いた。
「毎日って、豊洲からわざわざ？」佳乃が細い目をしばたく。
「あー、あたしさ、いま、この近くに住んでるからさ」未央は含みのある笑顔を浮かべる。
「え？　いつ引っ越したの？　知らなかった」真紀が、少し責めるような言い方をすると、未央は、「えっとね、実は」ともったいぶって、そこで言葉を切った。
真紀と佳乃は、未央の言葉の続きを待った。こうやって効果的にじらして演出するのは、未央の常套手段だ。二度目の結婚を報告した時もそうだった。「あたし、結婚するの」というセリフを聞くまで、ずいぶん時間がかかったのを覚えている。
未央はこの瞬間を待っていたかのように、芝居がかった様子で溜息をつき、足を組んだ。そしてメンソールの煙草の箱と百円ライターをポケットから取り出し、煙草に火を点けた。
煙草はいま一箱いくらだっけと、まったく別のことを考えながら、未央の様子を見守った。どうせ「実は」の後は、たいした告白ではない。本人にとっては重大なことかもしれないが、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com